

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第63号

● Contents ●

Topic: Regionalism in Northeast Asia from a Cross-Border Perspective.	(SADOTOMO Tetsu)	1
Northeast Asian Reports: "Japan Asia Lecture" at Novosibirsk State University of Russia.	(OKA Hiroki)	2
My Experience of observing and drinking Kumiss in Mongolia.	(TAKAKURA Hiroki)	3
Members' Forum: Folklore studies and what is taken to be 'natural'.	(KIM Hyeon-jeong)	4



国境地域から考える北東アジアの地域主義

日本大学 法学部教授
北東アジア学会 前会長
佐渡友 哲



日中、日韓の関係は現在「政冷経涼」にあり、日中韓3国の首脳会談は2012年5月を最後に途絶えている。日中、日韓それぞれの首脳会談も実現できていない。北東アジアに見られるこのような状況は、欧州、東南アジア、北米にもない奇妙な現象といえる。しかし日中韓の関係を政府間や政治地図からではなく、広く多様なヒト・団体・モノの交流の輪を視点に再構築すると、違った関係が見えてくる。最近行った釜山、対馬、与那国島などの国境地域での調査に基づいて、これまでの交流モデルを再検証してみたい。

筆者はこれまでに、北東アジアの地域形成について3つの仮説モデルを提示してきた。それは第1に、国境を超える地域間交流 (local to local) モデルの視点である。冷戦終結後の1990年代から、日本海/東海 (トンへ) 側の諸都市の自治体、経済界、大学、シンクタンクなどが中国、韓国そしてロシアの都市との新しい交流の時代に入ったという見方である。第2に、日本海/東海周辺の国境地域でヒト・モノによる新しい交流圏が形成されているという地域交流圏 (sub-region) モデルである。

そして第3に、国境を超えるヒトの往来、貿易や経済交流の進展が、やがて政府間のFTA、首脳外交にまで発展するという機能主義 (functionalism) モデルである。欧州に見られるように、石炭鉄鋼の共同管理から市場統合、通貨

統合、政治統合へとそれぞれの機能が積み上げられて最終的に地域統合が完成するという仮説を適用したものである。北東アジアや東アジアでは、研究者からはこの理論的枠組みは否定さ

れる傾向にある。

調査で訪れた釜山広域市は、福岡市や対馬との交流を含む、グローバルな自治体外交を展開している。また、2007年に開港した釜山港の巨大なコンテナターミナル (写真1) には



写真2. 対馬にある朝鮮通信使の碑

62基のガントリークレーンがあり、コンテナの取扱量は世界第5位で、東京港と横浜港を合わせた量の約2倍を誇る。ターミナルはまだ建設中、おそらくシンガポール港を上回り世界一のターミナルになると予想される。日本の57の港から週61便が到着する、まさに日本海/東海の物流のハブ港である。西日本の港から津軽海峡を通過する北米航路のコンテナ船は、ほとんど釜山港経由という。

人口約3万3千の対馬には年間、その5倍の韓国人観光客が釜山から国際定期船で訪れる。日韓関係600年の歴史資源 (写真2) と魅力的な自然資源があるこの島は、韓国から最も安価に行ける最も近い外国である。対馬から釜山までは50キロで、釜山の花火大会は対馬でも楽しむことができるという。筆者が利用した釜山発の300人乗りのフェリーはほぼ満席だったが、日本人は2人だけであった。これに加え、日本の25の空港から韓国へ定期便が運航され、年間250万~280万人の渡航者が出かけ、韓国からもほぼ同人数がやってくる。

こうした現地調査からも、前述の第1と第2の仮説モデルは検証できるのではと考えている。政府間関係やメディア報道によってつくられる「想像の日中韓関係」とは違った、実像の日中韓関係を観察しながら、これからも「政暖経熱人知」をめざしたい。



写真1. 釜山港の巨大コンテナターミナル

東北アジア通信

ロシア・ノボシビルスク国立大学での 「日本アジア講座」



東北アジア学術交流懇話会 理事長 岡 洋樹
東北大学 東北アジア研究センター長

東北アジア研究センターは、ロシア連邦のちょうど真ん中、シベリア第一の都市ノボシビルスク郊外のアカデムゴロドク（研究都市）にある、ノボシビルスク国立大学人文学部で「日本アジア講座」を実施している。

「日本アジア講座」とは、主に東北大学で日本関連の研究に従事している教員が、ノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科の日本語専攻の学生を対象として、講演を行うというもの。日本ではあまり意識されないことかもしれないが、日本研究は、いまや世界的な学術研究である。欧米や中国などの大学では、数多くの学生が日本語や日本文化を学んでいる。これらの学生は、日本の文化や社会に深い関心をもち、旺盛な好奇心をもって研究に挑んでいる。そしてロシアは、旧ソ連の時代から、欧米でも日本への関心が高い国の一つなのである。シベリアにあるノボシビルスク大学にも人文学部に東洋学科が設置されており、日本語・中国語・韓国語が教えられている（写真1）。

2008年に人文学部のパーニン学部長、ヴォイティシエック東洋学科長との間で覚書が締結されてから、毎年一回、日本研究者とともにノボシビルスクを訪問している。当初の予定は五年間であったが、2013年度の覚書期間終了後は、東北大学ロシア交流推進室の企画として、東北アジア研究センターが実施する形で継続されている。これまでの講義のテーマは、2009年度は、長岡龍作教授（東北大学大学院文学研究科）「日本の美術にみる自然表現と宗教観」、千葉正樹教授（高綱学院大学）「宮崎アニメの歴史認識：教育現場への浸透が意味すること」、岡洋樹教授（東北大学東北アジア研究センター）「近代日本人とユーラシア」、2010年度は、阿子島香教授（東北大学大学院文学研究科）「日本文化のあけぼの：旧石器時代から縄文時代へ」、高倉浩樹准教授（東北大学東北アジア研究センター）「日本の先住民族問題：アイヌ民族の歴史と現在を中心に」、2011年度は佐藤勢紀子教授（東北大学大学院国際文化研究科）「『源氏物語』と仏教思想：主要人物の人生解釈をめぐって」、2012年度は、

窪俊一准教授（東北大学大学院情報科学研究科）「カストロフと日本のポップカルチャー」、山田仁史准教授（東北大学大学院文学研究科）「神話とシャマニズム：日本・アイヌ・シベリア」、2013年度は荒武賢一朗准教授（東北大学東北アジア研究センター）「19世紀の海運業と沿岸社会の変化」というもので、日本の歴史・美術・思想・文学・サブカルチャーといった広いテーマに涉っている。そして今年2014年度には、木島明博教授（東北大学大学院農学研究科）「東日本大震災と沿岸復興（日本の科学と地域文化）」、佐野正人准教授（東北大学大学院国際文化研究科）「戦後の日本映画」の二講義が行われた。当初この講義はすべて日本語のみで行われていたが、最近はまだ日本語能力の高くない1～2年生のために、通訳をつけている。内容は日本での講義と大差ないにもかかわらず、聴講した学生の理解度は極めて高い。4～5年生は、通訳なしでも、講義をほぼ完全に理解していた（写真2）。

毎年の講義に合わせて、東洋学科の4～5年生が、卒業研究の発表会も催してくれる。学生が選ぶテーマは実に多彩で、学生たちが日本のほとんどすべての課題に関心を持っていることがわかる。今年の発表の例を挙げると、「現代の日本における社会的適応障害のある若者への支援」「日露の国際結婚」「現代の日本における陰陽道とその技法」「日本文化の現象としての宝塚歌劇団」「日本語のレキシカル・ギャップ」「明治時代における自由主義と保守主義の対比：西洋の政治思想の影響と比較」「若者言葉が使う若者の心理的な特徴」「戦国・江戸時代の紋章：歴史、機能、利用法」といった具合で、いずれも流ちょうな日本語で発表が行われる。学部レベルの言語教育でかくも高度の能力を身に付けさせる同大の教員達の能力には、目を見張らせるものがある。日本研究領域での日本とロシアの交流は、非常に大きなポテンシャルを有している。今はまだ少ないが、将来学生の留学による教育交流の進展が強く望まれるのである。



写真1. ノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科の教員達



写真2. 本年度の日本アジア講座を聴講した学生達と共に

東北アジア通信

モンゴルの草原でひたすら馬乳酒を飲んだ旅



東北大学 東北アジア研究センター教授 高倉 浩樹
(ロシア・シベリア研究分野)

天幕ゲルの扉付近の壁には、牛革製の袋のような馬乳酒容器フフル(khökhüür)があった。約100リットルが入り、その口には攪拌棒が突っ込んである。風呂を掻き回す要領で4~5分右腕を動かし、疲れたら左腕で続ける。家族の誰かがゲルに入ってくる度にこれが繰り返された。一万回攪拌すると美味しい馬乳酒ができるという。

モンゴルの遊牧キャンプを初めて訪問した私にとって強い印象となった光景である。2014年9月初旬、東北アジア研究センターがモンゴル科学アカデミー歴史学研究所など蒙・中・露の三組織と共同開催した国際会議に参加するためにウランバートルを訪れた。歴史研究所所長で、東北アジア研の客員教授を務めたチョローン先生がホストだったこともあり、都市から近い遊牧地に行きたいと頼んだところ、彼の故郷に行くこととなった。同行したのは、チョローンさん、滋賀大学のブレンサインさん、同僚の岡洋樹さん、彼の大学院生で私の通訳でもあった堀内香里さんだった。二泊三日の滞在だったが、シベリアの牧畜研究をしている私にとっては興味深く、多くを学べた旅となった。

遊牧キャンプの景観

滞在したのはウランバートルから南東100キロほど離れたイフ・ツァガン(ikh tsagaan)と呼ばれる草原。「大きな白」と意味で、近くに同じ名前の泉があるという。滞在した遊牧キャンプには二つのゲルがあった。一つは台所であり、もう一つは寝室用だった。寝室用は新しく、客間としても用いられており、我々はこちらに宿泊させてもらった。



写真1. 客として訪問したゲルで銀皿をもつ筆者(真ん中)と脇に立つ堀内さん。天幕の柱や調度品が美しいのが印象的だった。

天幕に入ると扉を背にして右手と左手に木製のベット=ソファがあり、真ん中はストーブとテーブル、一番奥には祭壇があり、仏画や家族の写真、それと馬の焼き印を付けるための金属製のタムガが飾ってあった。祭壇や建具、屋根を支える柱の飾り付けは黄色に白地の伝統的な模様で統一されていたこともあって、これまで自分が調査してきたシベリアの遊牧民と比べると、まるで博物館の展示がそのまま現存しているようと思った。(写真1)

馬の搾乳

馬の搾乳は、夏には一時間ごとに、秋は二時間ごとに行うという。滞在した時期は秋の区分にあり、9時から夕方6時頃まで実施された。朝になると、牧夫は宿营地周辺に放たれている馬群を追い立ててきて、天幕付近で子馬を捕まえる。草原なので樹木などなく、地面に杭を二つ打ち、その間を縄で結ぶことでゼル(zel)とよばれる駒繫ぎをつくる。子馬が繋がれると、母親はその場を離れない。夕方、搾乳が終わると子馬と共に放たれ草を食みに去っていく。

搾乳は駒繫ぎから離れた子馬を一頭ずつ母親の元に連れていき、最初に子馬に乳を飲ませ

せ、乳腺を開かせた後に、人が横取りするように搾乳する。この間の時間は極めて短く、1分半ほど。母馬近くに移動、30秒ぐらい乳を飲ませると30秒ぐらい人が搾乳し、元に戻す。一頭からは350mlほど乳を確保する。子馬は25頭おり、私が観察した時には一日に5度搾乳したので、計算上44リットル確保した。これがすべて馬乳酒となる。この家では馬乳酒は販売していない。すべて自家消費用だという。町に住んでいる家族や友人知人にもあげて使い切るのだという。(写真2)



写真2. 宿营地付近につれてこられた馬群。地面の縄がゼルである。

生活のなかの馬乳酒

馬乳酒アイラク(airag)はホルスという名の木の根から剥り出して作った器を使って飲む。チョローンさんが遊牧をしていた子ども時代、夏は馬乳酒が主要な食料で、そのため白い便がでるほどだったという。確かに、今回の滞在でも馬乳酒を呑む量は半端ではなかった。小さめのどんぶり程の大きさになみなみと注がれる。朝食から寝るまで、ちょっとゲルに座れば供されるという具合だった。

馬乳酒は社交の場でも当然飲まれる。遊牧キャンプに到着した夜は、蠟燭を立てた天幕のなかで男性2人が向き合い、歌いながら最後にモンゴル式じゃんけんをして負けた方が飲むという遊びもあった。またこれは私自身の体験だが、客に訪れた別の天幕では二リットルの銀の器に馬乳酒が注がれた。それだけならまだしも、別にウオッカが出され、それと平行して両方飲み続け、馬乳酒を空にした後は意識が翔んだ。

馬乳酒に始まり、馬乳酒に圧倒された旅であった。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。
 今回は、東北大学東北アジア研究センター研究支援部門の金賢貞助教に、2014年10月4日成城大学で開催された国際シンポジウム「『当たり前』を問う！ 一日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界」の参加記を紹介していただきました。

民俗学と「当たり前」

東北大学 東北アジア研究センター助教 金 賢貞
 (日韓比較社会・文化論)



筆者もかかわる「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」(代表：岩本通弥、基盤研究A、H26-30)などが共催、日本民俗学会が主催した国際シンポジウム「『当たり前』を問う！ 一日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界」が10月4日開催された。コーディネータの岩本氏は、1986年にドイツ・ハンブルグ大学民俗学研究所に作られた「日常の語りアーカイヴ」や民俗学における「日常」(Alltag)研究への転換などに刺激され、数ヶ月間ハンブルグ大学で調査・研究した。しかし、ドイツ民俗学のきわめて哲学的な「日常」概念を直ちに日本民俗学に導入・応用することは難しく、まずは類似した学問的土壌を有する東アジアの民俗学における「日常化=『当たり前になる』」ことの研究を共通の課題として想定・議論すべきと判断した。その最初の試みともいえる今回のシンポジウムでは、日本の民俗学・建築学研究者4人、中国の民俗学者4人、韓国の民俗学者3人が「民俗学と当たり前」「集合住宅／普通の暮らしの今昔」「普通の暮らしの捉え方」について発表・コメントした(図1)。

高度経済成長期以降、村という共同体の解体や年中行事などの衰退・消滅に直面した日本民俗学は危機的状況に陥ったとされ、そのあり方をめぐる自省的議論が相次いだ。このうち、民俗学は、伝統的な共同体のなかで傳承される年中行事や慣わしなどの民俗という「対象」ではなく、「方法」で規定すべきと主張した岩本氏の議論は注目に値する。それによれば、日本民俗学の創始者たる柳田国男は『民間伝承論』(1934)で「事象そのものを現象として、ありのままに凝視し、『わかっている』、『当たり前だ』といわれているその奥の真理を洞察する」ことが民俗学と規定した。当シンポジウムでは、この「当たり前」、具体的には最近当たりの住居形態になった高層集合住宅に着目し、日中韓における展開やその生活のあり方、さらに、各国の民俗学研究における位置づけなどが比較検討された。

高層集合住宅が当たりの住居形態として普及する現状は日中韓で似ていても、その認識は相違しており、興味深い。第四部の討論では、ごみの収集・処理方法をめぐるトラブルが日常化し、物が捨てられない中国人の気質から室内リフォームが頻繁に行われる中国と、高層集合住宅=アパートが理想の住まいとされ、社会の中流層以上からも好まれる韓国との違いが浮き彫りになった。久しくソウル市内のアパート暮らしをした筆者も、アパート=快適で安全な住居という認識を大半の韓国人が共有するという主張に異論はない。しかし、ごみ問題のみならず、最近騒音トラブルによる殺人事件が社会問題になるなど、多様な価値観やライフスタイルをもつ人々が同建物の中に住むことに対するネガティブな評価も決して少なくない。また、さる8月の中国・上海出張のとき、「別荘」と呼ばれる高級一戸建てが中国人の憧れの住居形態になりつつあることを知ったが、それでも(高級)高層集合住宅の人気は衰えていない。ここで疑問に思ったのは、高層集合住宅といっても一様ではなく、特に社会の「階層性」の問題を考慮すべきではないかということだ。日本のケーススタディとしてマンションが取り上げられたが、例えば「コンシェルジュがミニコンビニやカフェ業務も請け負う大規模物件」も含まれた。韓国の場合、ごみ・騒音問題や防犯などの面でよく問題になるのは、大衆的な「庶民アパート」がほとんどだ。有効な比較のためには、当該社会の歴史的・経済的コンテクストへの検討が先行すべきだろう。最後に、もう1点述べておきたい。中国民俗学で「民」は1990年前後に農民から国民=全民族へ拡大し、今はそれを「公民」と称するそうだ。そして、中国民俗学ではたとえば無形文化遺産政策などへの協力を通じて、民俗文化を国に公認された「公民文化」に位置づけることが重要課題とされている。確かに、日本や韓国の民俗学とは対照的に活発な今の中国民俗学を支えている議論の一つに無形文化遺産がある。1970年代以降、韓国の民族文化の創出過程に深くかかわった韓国民俗学に酷似している。個人的には、少数民族のアイデンティティ問題だけでなく、最近の香港デモによって喚起される社会の多様化・民主化の動きに中国民俗学がどう対応していくのか、慎重に見守りたいと考えている。



図1. 「『当たり前』を問う！ ～ 一日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界～」プログラム



今号は、当会の会員で、前北東アジア学会会長・日本大学法学部教授佐渡友哲先生から北東アジアの地域形成に向けた現状を論じた文章をいただきました。また、モンゴルでの遊牧キャンプ滞在の体験や、近代的な集合住宅の「当たりの前」の生活を描く民俗学、そして日本語を学ぶロシアの学生達といった東北アジアの多様な姿を論じた文章を掲載しました。(岡 洋樹)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第63号 2014年12月20日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 東北大学東北アジア研究センター一気付
 PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp